

山梨の歴史と文化の道

甲斐の国

山梨の道を探して

古道



栖雲寺より望む富士山

祖先は道を拓き峠を越え、 水と戦い、甲斐に歴史と文化を 伝えた。

山梨の古道は昔から甲斐九筋(若彦路・中道往還・駿州往還・鎌倉街道・秩父往還・青梅街道・穂坂路・逸見路・棒道)といわれ、人々は生活のために急峻な地形を克服して道を拓き、暮らしと豊かな文化をこの山国に育んできました。いま、その古道は役割を終え、多くは近代的な道路に生れ変わり、産業や経済・レジャーなど快適な生活文化をもたらしました。

しかしその街道筋を歩くと、私たちの祖先が営々と築いてきた、独特の文化遺産や民族の温もりが私たちの心に呼びかけてくれます。

この古道地図にあなただけの夢を忍ばせて、街を訪ね野山をめぐり、甲斐の道を再発見しましょう。

参考・引用文献

山梨県歴史の道調査報告書
山梨県歴史の道ガイドブック

発行：山梨県教育委員会
発行：山梨県教育委員会

古道



- 甲州街道
- 西郡路
- 佐久往還
- 若彦路
- 中道往還
- 駿州往還
- 鎌倉街道
- 秩父往還
- 青梅街道
- 穂坂路
- 逸見路
- 棒道

国道



『甲斐の国』山梨の道を探して

Index

- 2 はじめに
- 3 山梨の古道・山梨の国道
- 4 目次
- 5 甲州街道
起 点：上野原宿 面影：野田尻宿 コラム：猿橋
文化財：上野原本陣/西光寺/岩殿城跡/萩野の一里塚/下花咲の一里塚/恋塚の一里塚/
下花咲本陣（星野家住宅）/景德院/大善寺/矢立の杉/
万福寺/勝沼氏館跡/一宮浅間神社/栖雲寺石庭/善光寺/東光寺/
武田神社（躑躅ヶ崎館跡）/甲府城跡/長禪寺/玉諸神社/中林塚古墳/信玄堤/
武田八幡神社/願成寺/武田信義館跡/御勅使川第二将棋頭/神代桜/舞鶴松
- 10 西郡路
起 点：青柳追分 面影：荊沢宿 コラム：徳島堰
- 12 若彦路
起 点：砂田橋手前三差路 面影：上芦川集落 コラム：花鳥山一本杉
文化財：熊野神社/団栗塚古墳/広濟寺/小山城跡/宝珠寺/酒折宮
- 14 中道往還
起 点：柳町4丁目交差点 面影：右左口宿 コラム：煮貝
文化財：上曾根の一里塚/銚子塚/円樂寺/仁勝寺/永泰寺釈迦堂/精進の大スギ
- 16 秩父往還
起 点：小原四ッ角 面影：西川家住宅 コラム：川浦口留番所の門
文化財：窪八幡神社/放光寺/恵林寺/隼の大わらじ/吉祥寺/浄居寺
- 18 鎌倉街道
起 点：鶴飼橋 面影：御坂石畳 コラム：駒留馬蹄石
文化財：姥塚古墳/美和神社/下黒駒の大ヒイラギ/国分寺跡/富士浅間神社/称願寺
- 20 駿州往還
起 点：相生1丁目道標 面影：鯉沢宿 コラム：身延山久遠寺
文化財：法善寺/南部氏館跡/古長禪寺/内船寺/鯉沢河岸
- 22 青梅街道
起 点：山崎三差路摩利支天 面影：萩原口留番所跡 コラム：山梨岡神社
文化財：横根・桜井積石塚古墳群/寺本庵寺/万力林・雁行堤/向嶽寺/雲峰寺/甘草屋敷「高野家住宅」
- 24 佐久往還
起 点：葦崎追分 面影：葦崎宿 コラム：念場原周辺
文化財：源太ヶ城跡/若神子城跡/長沢宿問屋/新府城跡/昌福寺/長沢口留番所の門/海岸寺
- 26 徳坂路
起 点：塩部関屋地蔵尊前 面影：龍地宿と武田不動尊像 コラム：獅子吼城跡
文化財：法泉寺/塩沢寺/光照寺葉師堂/馬場口留番所/加牟那塚/根古屋神社
- 28 逸見路
起 点：貢川橋付近 面影：葦崎市小田川 コラム：花水坂
文化財：柳原神社/見法寺/花水坂の碑/花水坂（北杜市）/大堂の観音堂/花水坂（北杜市）
- 30 棒 道
起 点：若神子（北杜市）・小田川（葦崎市） 面影：渡沢宿 コラム：小荒間番所跡
文化財：逸見神社/三分一湧水/小荒間古戦場跡/谷戸城跡/観音堂/大井ヶ森番所跡/金生遺跡

甲州街道



■ 甲州街道の起点を探して…上野原宿 (上野原市)

国道20号を神奈川県津久井郡藤野町を過ぎたあたり、神奈川県中央交通のバス停「名倉入り口」で左折し、急坂を下ると相模国と甲斐国の国境に架かる境沢橋に至る。ここが甲州街道甲斐の国の起点となる。近くには「諏訪の番所」跡があり、そこを通り過ぎると今でもその面影を残す上野原宿「諏訪」の集落にたどり着くことになる。



■ 甲州街道の面影を探して…野田尻宿 (上野原市)

鶴川宿から1里3町余り。県道改修に伴い変化が進んでいるが、道路側の側溝はかつての水路があり、宿場の景観を残している。



■ 甲州街道の面影を探して…台ヶ原宿 (北杜市)

韮崎宿から4里。問屋場は宿内中程にあって、伝馬荷物、武家荷物、商人荷物を韮崎宿へ継いだ。緩勾配切妻の町屋が左右に軒を並べかつての宿景観を残している。



江戸時代の五街道の一つ。江戸日本橋から中山道下諏訪宿までを結ぶ。里程53里2町余りといわれている。宿は45ヶ所あり甲州は上野原、鶴川、野田尻、犬目(上野原市)、下鳥沢、上鳥沢、猿橋、駒橋、大月、下花咲、上花咲、下初狩、中初狩、白野、阿弥陀道、黒野田(大月市)、笹子峠を越えて、駒飼、鶴瀬(大和村)、勝沼(勝沼町)、栗原(山梨市)、石和(笛吹市石和町)、柳町(甲府市)、韮崎(韮崎市)、台ヶ原、教来石(北杜市)へと25宿あった。番所は甲斐と相模の国境付近に諏訪番所(上野原市)、郡内口に鶴瀬番所(大和村)、信州口に山口番所(北杜市)が置かれた。

現在上野原市野田尻周辺には恋塚などの一里塚、北杜市白州町台ヶ原周辺などに街道の面影を残している。

■ サルの知恵が生きた「猿橋」

その独特な構造から日本の三奇橋の一つとされる猿橋は、江戸時代も今も訪れる人は多い。

猿がフジツルをつたいながら谷を渡るのにヒントを得たとか、何匹もの猿が手をつないで谷を渡るのを見たとか、百濟人が教えたとか諸説もあるが詳細は不明である。甲斐と武蔵を結ぶ要衝でもあり、多くの旅人がこの橋に驚きを示したといわれる。菰生徂來は、橋の上に穴があり橋桁も危なく松明で恐る恐る渡り、広重は橋の西の茶屋で“やまめの焼きびたし、菜びたし”の昼食をとったという話が残されている。今も猿橋は観光地だが、橋の上から月を見る観月会が催されるなど、文化の香りも保たれている。

コラム



歴史と文化遺産



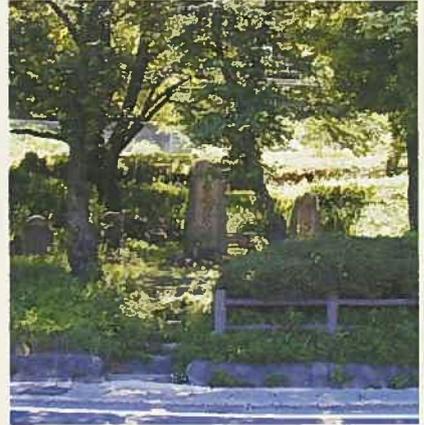
うえのはら
上野原本陣

上野原宿の中心にあり、通りから10mほど中に入った所にある。『大概帳』には「凡建坪六拾五坪門構・玄関附」とある。現在は門構えと土蔵など外廻りが残り当時の面影が残ってる。



いわとの
岩殿城跡

『大月市史』では、天文元年(1532)小山田信有が中津森の館を谷村へ移した際、要害城として築城したとする。桂川を隔てて大きな岩肌をみせる岩殿山は、往時の旅人の目にもとまったはずである。



しもはなさき
下花咲の一里塚

下花咲宿の入口にあり、もとは道の左右にあったが、今は北側のものは完全に失われ、南側のものだけが面影をどめ、大月市指定史跡となっている。かつては塚上に榎が植えられていたという。ここには今でも多くの石造物が残されている。



さいこうじ
西光寺

臨済宗で、本尊は虚空蔵菩薩。江戸時代に後の山中より天長元年(824)の古碑が出土し、「弘仁辛卯如空西光寺殿二十柄家尼法印長峯山後天長元立」の銘があったという。

当初真言宗寺院として開創され、のちに現宗に転宗したと伝えられている。



おぎの
萩野の一里塚

『大概帳』に「左右の塚共に野田尻宿地内木立松」とある。北側の塚は自然の地形を利用し「ひら松」と呼称され、南側のものは塚を築いたといわれている。



こいづか
恋塚の一里塚

『大概帳』に「左右の塚共に犬目宿地内木立左杉 右松」とある。北側の塚は消滅したが、南側のものはこんもりと盛られた塚の形態をよく残している。



歴史と文化遺産



下花咲本陣(星野家住宅)

『大概帳』には「凡建坪三給五坪、門構・玄関共無之」と規模が小さいが、それは天保7年(1836)の火災後の仮普請であると注記されている。現在の建物は、嘉永5年(1852)には既に完成していたと考えられる火災後の建物で、当初規模で109坪ほどあるが、焼失前はそれよりも大きく、今より街道から奥まった所にあったといわれている。



だいぜんじ 大善寺

養老2年(718)に行基が薬師如来像を刻み、木尊として安置したことに始まる。のちに聖武天皇(在位724~748)から柏尾山鎮護国家大善寺の寺号と勅額を賜り、皇室や歴代の幕府の祈願所として栄えた。最盛期は52坊、3000の坊舎が並び、日川を越えて寺領が広がっていたといわれている。



まんぶくじ 万福寺

聖徳太子の命を受けた調子麿が甲斐へ入国して時の国司・秦川勝の助けを得て建立したといわれ、奈良朝にまで歴史を遡ることができる。その後、法相・天台・真言の三宗兼学道場であったが、鎌倉期の寛元2年(1244)に当時の住職・源誓坊光寂が万福寺に身を寄せた親鸞に深く帰依して浄土真宗となっている。



けいとくいん 景徳院

甲斐の国主として500年あまりも栄えた武田一族が滅亡した所として有名。武田勝頼、勝頼夫人、嫡男信勝の3人が天正10年(1582)にこの場所で自刃した。勝頼37歳、夫人19歳、嫡子信勝16歳だった。後に家康がこの地に一寺を建立し、僧・拈橋を開山として武田の家臣も含めその菩提を弔ったといわれている。



やだて 矢立の杉

『甲斐国志』や『甲斐叢記』などに登場したり、北斎、二代広重の名画にも残る名木。樹高28m、根回り14.8m、樹齢約1000年。幹が損傷したり、空洞があるが県内有数の巨樹。県天然記念物。



かつめまし やかた 勝沼氏館跡

武田軍団の親類衆として活躍していたが、永禄3年(1560)に信玄によって滅ぼされた。昭和48年(1973)からの発掘調査で濠に囲まれた内郭部から建物、土塁、堀、門などの跡、多数の陶磁器、武具などが見つかっている。



歴史と文化遺産



いちのみやあさま
一宮浅間神社

平安時代の富士山の噴火を鎮めるため貞観7年(865)に清和天皇が現在地に遷地した。甲斐国第一宮といわれ、武田家の崇敬も厚かったという。毎年正月には各地から多数の初もうで客が訪れ、県内でも有数の参拝場所となっている。



せいうんじ
栖雲寺石庭

業海本浄が貞和4年(1348)に開山したという寺。業海は文保2年(1318)中国に渡り、天目山の善応国師に学んだ。のちに帰国して、この地が中国の天目山に似ているとの理由で栖雲寺を開いたという。この寺は鎌倉建長寺末の四大寺院の一つで、武田家の菩提寺として繁栄し、石庭が有名であり、境内には信満(武田家10代)の墓もある。



ぜんこう
善光寺

武田信玄は信濃の善光寺が兵火にかかるのを恐れて、永禄元年(1558)に三国伝来の阿彌陀如来と数々の寺宝を甲府に移し、信濃善光寺の鏡空(さようくう)上人を開基として新たに堂塔を建立されている。



とうこう
東光寺

室町時代の作といわれ、鎌倉禅宗様式の代表的な建築物で国重要文化財である。堂内には本尊の木造薬師如来座像と十二神将像が祀られている。いずれも県重要文化財。

境内には山門、仏殿、本堂が一直線に並んで建つ。本堂の裏には背後に迫る山を利用して作った池泉観賞式の庭園がある。



たけだ つつじ がさき
武田神社(躑躅ヶ崎館跡)

旧県社、祭神は武田信玄。創建は大正8年(1919)であり社地は躑躅ヶ崎館跡にある(国史跡)。躑躅ヶ崎館は信玄が住み、領国の政治、経済、文化の中心になった。信玄の父・信虎が建て勝頼が蒲崎・新府城を造るまで親子三代が生活している。

歴史と文化遺産



こうふじょう
甲府城跡

天正十年(1582)武田氏滅亡・織田信長死後の甲斐争奪戦において北条氏に勝利した徳川家康はこの地に築城をはじめた。

徳川綱重・綱豊、柳沢吉保・吉里らが城主となるが、享保九年(1725)以降は再び幕府の直轄地となり甲斐勤番の支配下におかれることになる。明治元年(1868)に廃城になっている。



ちやうぜん
長禅寺

武田信玄の母大井夫人の菩提寺。岐秀元伯(ぎしゅうげんぱく)が開いた臨済宗妙心寺派の名刹。はじめは現在の南アルプス市鮎沢にあった。

信玄は臨済禅の関山派に深く帰依し、京都や鎌倉五山にならって甲府五山をおき、長禅寺をその主座としたという格式と山緒のある寺である。



なかまき
中秣塚古墳

7世紀の中期から後期に造られた横穴式石室の円墳で、石室は玄室(人を埋葬した場所)の胴部が広く、玄室に入る通路が細くなっているのが特徴。規模は直径約15m、高さ約2.3m。古墳の内外から鉄製の剣や小玉・やじり・須恵器などが多数出土されている。県史跡。



たまもろ
玉諸神社

旧県社。祭神は大國魂命で、国王社ともいう。甲斐国第三宮。代々国守の擁護を受け、武田氏の祈願所ともなった。社殿は武田家滅亡の天正十年(1582)織田勢に焼き払われた後、徳川氏が慶長年間に現在の社殿を再興している。



しんげんづつみ
信玄堤

約450年前、武田信玄が築いたとされる堤防。急流な釜無川と御勅使用の合流点を治めることは、甲府盆地を水渦から守るために重要だった。御勅使用の下流に「石の積出」「将棋頭」を設け、流れを二分させるとともに、その流れを釜無川の本流と衝突させ、合流した水を高岩にぶつけて勢いを和らげた。さらに水勢を弱めるため、堤防から川の中心に向け斜めに5本の堤を突き出して設けた。この形態を雁が飛ぶ姿に似ていることから「雁行堤」と呼ばれている。



歴史と文化遺産



たけだ はちまん
武田八幡神社

祭神は菅田別命、足仲津彦命、息長足姫命、武田武大神。弘仁13年(822)に嵯峨天皇の勅命で現在地に移され、宇佐八幡、石清八幡宮を勧請して武田八幡と称するようになった。武田氏の氏神として信仰を受け、現在の本殿は天文10年(1541)に信玄が造営した。三間社流れ造り、ヒノキ皮ぶきの建築様式が素晴らしい。本殿は棟札5枚とともに国重要文化財。本殿東隣の宮末社は桃山時代に建立され、一間社流れ造り。



がんにょう
願成寺

宝亀2年(771)心休了愚法印によって開創された京都祇園寺の末寺といわれている。延長6年(928)地藏菩薩を安置して願成寺と号したという。武田信義が諸堂を整備した時、京都より阿弥陀三尊を迎えて奉安し、願成寺の本尊とした。天正10年(1582)織田信長の兵火に伽藍は焼失したが、仏像は焼失を免れ、今日に伝えられ国重要文化財の指定を受けている。



たけだのぶよしやかた
武田信義館跡

甲斐源氏総領武田氏発祥の地である。八百余年の昔、源信義がここに居館を構えて武田太郎と号し、甲斐源氏一族を率いて強大な武力を誇った。墓は願成寺にある。館跡はおよそ250㎡の地であった。当時を偲ぶ土塁の一部が現存している。



じんたい
神代桜

実相寺にある。種類はエドヒガンで、開花する花の白色からシロヒガンとも、一か所に群がって咲く様子からムレヒガンとも呼ぶ。伝説では日本武尊が東国遠征の記念に手植えた。鎌倉時代のころ、日蓮上人が衰弱している桜の回復を願ったところ、不思議と次第に回復していったとも伝わる。国天然記念物。



みだいがわ
御勅使川第二将棋頭

竜岡将棋頭とも呼ばれる。武田信玄の治水工事の一つとされ、御勅使川の上流へ向けて将棋の駒(こま)のような形の堤防を設け、水の流れを分断して水勢を弱める仕組み。築造は天文11年(1542)~永禄3年(1560)ごろと推定される。昭和62年(1987)に発掘調査が行われた。第一将棋頭は南アルプス市にある。



まいづる
舞鶴松

樹齢は約450年と伝わる。枝の上に枝を重ねた樹形が美しく、ツルが羽を広げた姿によく似ていることからその名が付いた。樹高9m、根回り4m、枝分かれし、左右に広がる総枝回りは74m。全体が約370本木の支柱で支えられている。全国でもまれにみるアカマツの名木。国天然記念物。



西郡路



駿州往還(河内路)の鯨沢宿(鯨沢の河岸として栄え、口留番所も置かれた。)から甲州街道の葦崎宿に至る道で、荊沢(南アルプス市)が中継地点であった。
現在の国道52号とほぼ一致する。鯨沢河岸に集結する逸見筋、武川の年貢米を始め、信州松本領の廻米などもこの道を下った。また駿川の海産物もこの道で信州へ運ばれた。



■西郡路の起点を探して…青柳追分(増穂町)

あおやぎおいわけ

青柳追分は西郡路と駿州往還の分岐に位置している。交差点には『右に甲府、左に信濃』の石碑がある。

街道を挟むそれぞれの側には人家が多くあり当時の賑いを感じられる。



■西郡路の面影を探して…荊沢宿(南アルプス市)

ばらざわ

荊沢は当初市場として開設された集落といわれている。その時期は天正八年(1580)頃とされている。また、治安維持のために宿場中央の街道は「カギ手」になり今でもそのまま残り当時の面影を残している。

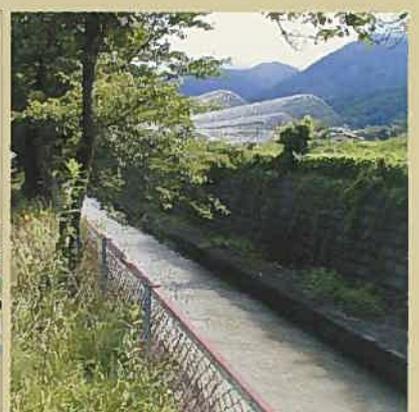


■徳島堰

とくしませき

日本三大堰の一つ。南アルプス市曲輪田新田と葦崎市円野町上円井を結ぶ農業用水路、総延長17km。干ばつ常習地の御勅使川扇状地には原七郷と呼ばれる7村があり、飲料水にもこと欠き貧しかった。堰は寛文4年(1664)、江戸・深川の商人、徳島兵左衛門俊正が幕府の許可を得、翌年着工。3年かけて完成させ、水約500haを灌漑したという。兵左衛門は完成を記念し妙浄寺を建立し、七面大明神を祀る。兵左衛門の墓と徳島堰碑があり、つり鐘には恩恵を受けている村々の名を記す。石積みや板で造った堰は水漏れが激しく、昭和40年(1965)に永久化、さらに東電釜無川第3発電所の放水、釜無川からの取水、有野地区に調整池を設けるなどして工事を完成。300年にわたる水との闘いを終えた。

コラム



甲州往還
西郡路
佐久往還
老彦路
中道往還
駿州往還
鎌倉往還
秩父往還
青柳往還
碓氷路
碓氷路
碓氷路

若彦路



■若彦路の起点を探して …砂田橋手前三差路(甲府市)

日本武尊伝説発祥の地、甲府市酒折を起点とすべきであると思われるが、『甲斐国志』の絵図では、板垣村を起点としている。板垣村は現在の甲府市酒折の西に位置する。善光寺参道の東に甲州街道から南に分岐する道が描かれている。この道が逢橋に至っていることから、若彦路の起点は国道140号から南下し濁川を渡る砂田橋付近とされる。



■若彦路の面影を探して…上芦川集落(芦川村)

旧道は、集落の中を抜けている。南面の急傾斜地に立地する集落であるため、道下の家の屋根はすぐ足下に見える。甲造りの茅葺き屋根が何軒か残り、山村集落の景観を今に伝える。集落に入るとすぐ右手に諏訪神社があり、静岡から甲府へ魚類を運ぶ荷次場が馬宿として栄えたところだという。村全体に石垣の残る美しい景観が何百年の歳月の中で徐々に築かれ往時の面影を残している。

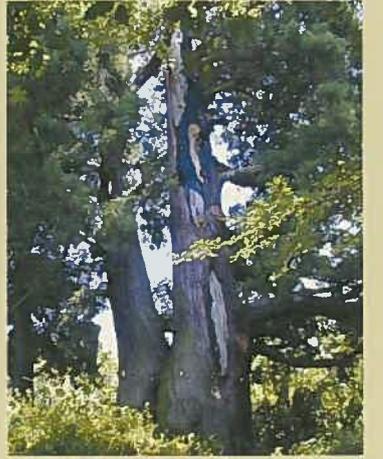


若彦路は甲府市東部の板垣から始まって国玉、小石和、竹居、奈良原(笛吹市)、鳥坂峠を越えて上芦川(芦川村)、大石峠、大石、長浜、大嵐(富士河口湖町)、さらに鳴沢村から富士山西北麓の原野を斜めに横切って、富士宮市上井手で中道往還と合流する道筋となっている。既に平安時代末期(1180年)から「若彦路」の名称が『吾妻鏡』に記されている。源頼朝の拳兵に応じた甲斐源氏の軍勢が「富士北麓若彦路を越えて駿河に向かった」となっているが、官道的に利用されたのは今の八代町(笛吹市)に甲斐の政治の中心があった時代とされる。

■伝説の地に残る大きな木「花鳥山一本杉」

日本武尊が東国征伐後、凱旋した道を、皇子の稚武彦王の名に因んでつけたのが若彦路。この道には今も一本の木に伝説が生き続けている。それは、日本武尊が使用した杉箸を地面にさしたものが根付いた、と伝えられる花鳥山の杉。この木は根が二本あったが、地上部で主幹が合着し成長、大樹となり今も樹勢が盛んだ。幹は空洞化しているものの、樹高は25m、堂々と立ちそびえている。樹齢については不詳だが、この木を仰ぎ見ると伝説の世界に引き込まれていく。往時、歩く人が道しるべにしたであろう山の一本杉、この花鳥山の眺望はすばらしく、桃の季節には周辺の山々がピンクに染まる景色を一望できる。

コラム



歴史と文化遺産



くまの
熊野神社

朱鳥年間(686年頃)に紀州熊野社領八代荘に勧請されたと伝えられる古社で、甲斐熊野四所の第一の霊場である。

県重要文化財の銅鏡、町重要文化財の長寛勘文、熊野曼荼羅が保存され、境内には根元の周囲6.4m、樹高21mのコヤマキ、また、根元周囲10.2m、樹高29mの笛吹市第一の巨木であるイチョウが樹成旺盛にそびえる。



どんぐりづか
団栗塚古墳

5世紀後半の築造とみられる。前方後円墳だが、明治の道路工事で前方部は削られて後円部のみ残る。高さ2.8m、長径18m。竪穴式石室、組み合わせ式石棺を有する。副葬品の「銅鏡」は熊野神社にある。県重要文化財。



こうさい
広済寺

奈良原の集落の手前を左に入ると大きな山門と笛吹市指定文化財のヒラギの巨木がある。参道は200m以上続く上り坂で甲府盆地が展望できる。

600年近い歴史をもつ広済寺は、応永16年(1409)武田陸奥守信春が、向嶽寺3世・峻翁令山の教えを受け継いだ虎溪道童を迎え、禪宗として中興した禪寺。それ以前は天台宗の寺院だったといわれる。



こやま
小山城跡

浅川扇状地北端の小丘を利用して築かれた平山城で、一辺約80m・高さ約5mの高土塁によって四方を固めている。一部、破壊により欠損しているが概ね保存状態がよく、北側には堀跡、西側・南側には外部からの侵入を阻止したと思われる低土塁等の遺構も残っている。



ほうしゅう
宝珠寺

寺の裏山にある100体の観音石像で、通称「百観音」。約450年前、室町將軍家の縁者である足利常元が、全国100カ所の霊所をめぐって集めた土と一緒に観音像を安置。それらは大雨で流されたが、天保の大飢饉のとき地域住民が救いを求めて再建し、天保13年(1843)に完成したといわれる。



さかおり
酒折宮

祭神は日本武尊。「古事記」「日本書紀」の中で日本武尊が東征の帰途立ち寄ったとされる。また、連歌発祥の地として有名。境内に本居宣長撰、平田篤胤書の「酒折宮」、山県大弼の「酒折祠碑」などの石碑があり江戸時代の国学が盛んなころ注目をされた。9古道の起点といわれているが不詳である。



中道往還



中道往還の起点を探して…柳町4丁目交差点(甲府市)

中道往還の出発点は、甲府市中央1丁目と中央5丁目の国道140号沿いの甲州街道の八日町にある。これから県道甲府市川大門線を南下するがこれは甲州街道と共通であるため事実上の出発点は甲府市中央4丁目交差点付近とされている。

中道往還は甲府市柳町四丁目まで甲州街道と分かれ南下し、中小河原・小瀬・小曲(甲府市)を經由し笛吹川を渡り、上曾根・右左口(中道町)右左口峠を越え芦川沿いの古関を経て精進湖、本栖湖へとづく。現在の富士宮市上井手で若彦路と合流する道筋となっている。

この道は甲斐と駿河との交通路のうち、若彦路と駿州往還(河内路)の中間に発達したことから「中道」と呼ばれた。

甲府盆地に接する地域(曾根丘陵)は、原始古代の歴史の宝庫であり、大和朝廷の勢力が地方に波及して築造された大小50基余りの古墳が点在し古墳文化の顕著な所となっている。この道は海産物、甲斐絹、竹細工、煙草、などが運ばれる公益路となり中央本線、身延線の開通まで経済活動の大動脈となった。

中道往還の起点を探して…柳町4丁目交差点(甲府市)

中道往還の出発点は、甲府市中央1丁目と中央5丁目の国道140号沿いの甲州街道の八日町にある。これから県道甲府市川大門線を南下するがこれは甲州街道と共通であるため事実上の出発点は甲府市中央4丁目交差点付近とされている。



中道往還の面影を探して…右左口宿(中道町)

江戸時代には戸数245戸、人口815人、石高718石余で、中道往還の宿として栄えた。現在でも中央の急坂を中心に500m足らずのところに180戸余りが左右に立ち並び、改装はされているものの往時の屋敷割を伝えている。



馬の背から生まれた「煮貝」

甲州特産の「煮貝」は、駿河で獲れたアワビを醤油樽に入れ馬の背に乗せて運んだところ、その揺れ具合と馬の体温で熟成し甲府に着いた頃、美味い具合に仕上がった、と伝えられている。まさに道が生んだ産物のひとつ。栄養豊かな保存食「煮貝」は山国の海の幸として、今も人気の郷土の味。中道往還は、甲府一沼津間を最短距離で結ぶ道で、古代には駿河の文化を甲斐に伝え、中世・戦国時代には軍用道路の役を担った。その後、海産物の輸送路となりいつしか馬の背から生まれた「煮貝」は、後世まで珍味として珍重される特産品となった。



コラム

歴史と文化遺産

かみぞね
上曾根の一里塚



わずかな高まりを見せる塚には、目通り幹囲2m余の椈の巨樹が立ち、根元には祠が三基ほどある。中道往還に残る唯一の一里塚であり中道町指定の史跡となっている。



ちやうし
銚子塚

古墳時代前期、4世紀後半頃造られた竪穴式石室をもつ前方後門墳(鍵穴の形をした古墳)である。この古墳は県内でも最も大きなもので、東日本でも最大級の規模を誇るものである。昭和3年に石室が開けられ、中からたくさん副葬品が発見され、昭和5年には隣の丸山塚古墳とともに国の史跡に指定されている。

古墳の大きさは全長169m、後門部直径92m、高さ15m、前方部幅68m、高さ3.5m。周囲の溝の幅は15~25m。石室は割り石を小口積みした竪穴式石室で長さ約6.6m、幅約0.9m、高さ約1.35m。



にんしやう
仁勝寺 木造聖徳太子立像

仁勝寺は、臨済宗の寺で、室町時代に甲斐の守護武田信満の二男信長によって開かれた。本尊の聖徳太子16才の像は、鎌倉時代に盛んになった太子信仰の所産で、法身に七条の袈裟をまとっている。

椀材の寄木造りで彩色が施されている。多少の損傷はあるが鎌倉時代の作風を伝える名作である。

像高1.15m。
国指定重要文化財



えんらく
円楽寺

大宝元年(701)、役の行者小角によって開創されたと伝えられている寺である。

役の行者小角は富士登山の道を開いたといわれ、この円楽寺を初地として、洞山、阿難坂(女坂)、迦葉坂(右左口峠)を越え、精進湖で身を清め富士登山をしたと云われている。

町指定の文化財として樹齢500年余りの銀杏の木、県の指定として役の小角自刻像《胎内には延慶2年(1309)の墨書がある》と共に、前鬼後鬼の像が安置されている。



えいたい
永泰寺 釈迦堂

永泰寺は、臨済宗の寺で、夢窓国師が再興したという。寺内の釈迦堂の建立年代は絵模様や彫刻などから江戸時代後期と推定される。本尊の釈迦は昔、釈迦ヶ岳山頂に安置されていたが、大暴風雨の時亀の上に乗って現在の地に飛来したという伝説がある。



しやうし
精進の大スギ

精進の氏神である諏訪神社境内にある。樹齢1200年、根元の周囲12.6m目通り幹囲12m。枝張りは東西18.8m、南北19.5m、樹高40mあり、スギの巨樹として国の天然記念物に指定されている。現在もお樹の勢いは盛んである。



秩父往還



秩父往還の起点は二説あるが一般には小原西(山梨市)から笛吹川左岸を北上し、塩山市橋立の放光寺前から東へ向かい三宮村へ入る。一の橋を渡り笛吹川右岸へ出てこの上流が川浦となり雁坂峠へと続く。峠を下ったところに埼玉県大滝村があり、そこから荒川の峡谷に沿って下り大宮(埼玉県さいたま市)まで達する道筋となっている。秩父道、雁坂路、甲州裏街道とも呼ばれ古代から甲斐と秩父を結ぶ第一の道であった。

古くは日本武尊説話が残る場所があり、大和朝廷の軍事的勢力征服の進路を示している。また、武田信玄もこの雁坂口を重要拠点とし、山梨県側に川浦・埼玉県側枋本に口留番所を設けた。

いつの時代にも秩父山地連峰の標高2082mの雁坂峠越えには苦勞があり、荒れ果てた峠道となっていた。この道は現在の国道140号とほぼ一致しており、平成10年4月23日雁坂トンネルの開通により現在では首都圏とを結ぶ動脈となっている。

秩父往還の起点を探して…小原四ッ角(山梨市)

江戸時代中頃までの秩父往還は、小原村西分(山梨市小原西)の笛吹川畔で青梅街道から分岐していたが、正徳3年(1713)の大水害で南隣の上神内川の町並みが流失して以後は、安全を求めて青梅街道が移動したため、分岐点是小原四ッ角に変わっている。



秩父往還の面影を探して…西川家住宅(山梨市牧丘町)

鎌倉末期の頃からこの地方を治めた足利の将、二階堂氏に仕えた旧家。建築年代は不詳。江戸中期の特徴を備えている塩山市の高野家とともに貴重。切り妻、茅葺き屋根で棟持ち柱の典型的な甲州民家の形式を備える。県重要文化財。西側に夢窓国師が築いたといわれる名園がある。



コラム

人と物をチェックした「番所」

かつて甲斐と武州を結ぶ重要路として開かれていた秩父往還。雁坂路とも呼ばれるこの道に復元されているのが川浦口留番所。番所は番屋とも呼ばれ、永徳4年(1382)に設けられ人や物資の往来を取り締まった場所だった。ここでは15坪の敷地に番屋と門、廁(便所)があり、番人が毎日二人ずつ24時間交代で取り締まったと伝えられている。街道を往く人にとって番所の存在は如何なものだったのだろうか。現在番所の門は移築されている。1998年難所と言われた雁坂峠に全長6.6kmのトンネルが開通、山梨と埼玉がぐんと近くなった。600年余り前の番所と峠を貫いたトンネル、道が持つ歴史の一コマが感じられる。



歴史と文化遺産



くぼはちまん
窪八幡神社

窪八幡神社の創始は貞勸元年(859)に勅によって九州宇佐八幡宮が勧請され、笛吹川の中島である大井俣に祀られたので大井俣神社と称したのがはじまりといわれ、延喜式内の古社と伝えられている。祭神は八幡信仰の主神応神天皇・仲哀天皇・神功皇后の三神が祀られている。構造は三間社流造の三殿が間に1間をおき、それぞれ横に連結して11間の形となる。扉には華麗な金箔装飾が施され、弘治3年(1557)に武田晴信(信玄)が荘厳を加えたという記録が残っている。



えりん
恵林寺

夢窓国師が開き、快川和尚が「心頭滅却すれば火も自ずから涼し」という偈を残した。

南北に長い寺域はまず南端の黒門を入り、スギやヒノキの生い茂った暗く長い参道を進むと国重要文化財の四脚門(赤門)。庭の北端に県重要文化財の三門、その先には開山堂、本堂、庫裏などが建っている。

寺歴は、夢窓国師が乾徳山にこもって修行していたとき、鎌倉幕府の要人で国師に帰依していた牧の庄の領主の二階堂道徳が元徳2年(1330)自ら屋敷を解放し、国師を開山として禅院に造営したのが始まりといわれている。



ほうこう
放光寺

南北に長い放光寺の寺域へは、南端の山門から入る。そこからウメを植えた長い参道がある。さらに進んで車道をまたぐと石段の上に仁王門がある。中の仁王像は鎌倉時代、成朝作の国重要文化財。手入れの行き届いた庭には四季の花木が植えこまれていて、近年、花の寺と呼ばれている。

築地塀を巡らせた唐門を入ると広い内庭の正面に本堂、右手に庫裏、左に宝物殿がある。中には、平安時代の作で木彫寄木造りの本尊・大日如来像ほか、不動明王像、愛染明王座像など国重要文化財が収められている。



はやぶさ
隼の大わらじ

旧秩父往還の町の入り口にある大桜に長さ2m、幅1mのわらじを掲げる厄除け。かつて村を襲った疫病から村人を救った旅の僧侶が忘れていったものを奉納したといわれ約450年前から伝わる。毎年3月に地区の人たちがつくり奉る。



きちじょう
吉祥寺



寺の小さな石段を15段ほど上ると正面に真言宗の山寺らしい風雨に耐えた本堂があり、右手に庫裏、本堂脇には県指定天然記念物のエドヒガンの大木「新羅ザクラ」がある。このザクラは甲斐源氏の祖である新羅三郎義光お手植えの伝説があり、昭和23年、倒れた三代目の木は幹囲3.1mあった。ところが放置した根元から再び芽が出てこれが四代目のザクラとして成長し、現在は目通り幹囲1.25m、樹高9mとなっている。



じょうこう
浄居寺

曹洞宗大泉寺末。嘉元3年(1305)創立。実質的には夢窓国師が建立した。浄居寺城築城に際して現在地に移った。更に浅尾新田(北杜市明野町)に移され、元和年間再び現在地に陽山宗広が再興、現宗派となる。



鎌倉街道



『甲斐国志』では鎌倉街道は、現在の石和町(笛吹市)、黒駒・藤木(笛吹市)、御坂峠、富士河口湖町、上吉田(富士吉田市)、山中湖村、須走・足柄(静岡県)とした道筋となっている。現在の国道137号、138号であり御坂路、駿州東往還、沼津街道、小田原道とも呼ばれている。

古来、甲斐と駿河を結ぶ道路の中で地理的に東海道に最も近くかつ道筋に人家が多く危険度が低かったことにより最も利用されていた。鎌倉街道は歴史上果たした役割が非常に大きいとされている。中央、地方を結び年貢を背負って困難と戦いながら往来し、戦国時代には武田氏と北条氏がこの街道を中心に戦った。

また、江戸時代には、富士道者・伊勢詣りなどの信仰によるもの、馬背による商品流通などが盛んに行われていた。その後も、この街道は御師職、養蚕、機織り、馬方稼ぎの人たちで賑わいは続いた。

■鎌倉街道の起点を探して…鵜飼橋(笛吹市石和町)

近世の鎌倉街道は石和宿に始まる。遠妙寺より西で甲州街道から分岐していたといわれている。ここから笛吹川を渡ることとなる。かつては鵜飼川が流れていたが水害により景観が一変した。河道の変遷に伴い街道も動かざるを得なかったとされている。



■鎌倉街道の面影を探して…御坂石畳

国道137号に沿って小道が鎌倉街道として御坂峠方面に登っていく。金川にかかる橋を渡ると戸倉である。「戸倉遊歩道」が鎌倉街道の古道といわれている。

国道下の小道を登っていくと立沢の集落である。そこに鎌倉時代の石畳が僅かに残され「全国歴史の道百選」に選ばれている。江戸時代には駒木戸口留番所がこの付近に置かれていたとされている。



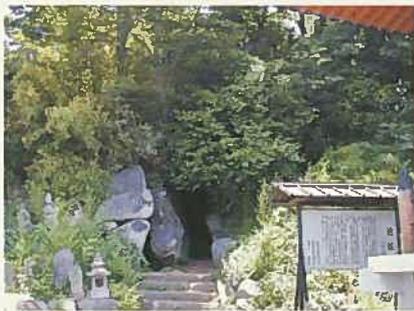
■聖徳太子が空を駆け富士登山

富士山にまつわるさまざまな伝説の中で奇想天外なのが「聖徳太子の富士登山」。その昔、太子が調教した馬にまたがり、試し乗りをすることになった。手綱を引きムチを当てると、何と馬は東の空へと飛び出す。宮人たちの心配をよそに、太子は三日後に帰り「雲の中を飛び、富士山を見てきた」と楽しげに語り始める。頂上には岩穴があり、その中に入ると大蛇に出会い、これを山の神と崇め太子がひざまずくと、その姿は大日如来へと変身したという。太子馬駆け伝説は県内各地に残され、馬の蹄の跡を残す石もある。富士山と聖徳太子、日本を代表する要素がとけこむファンタジーだ。



コラム

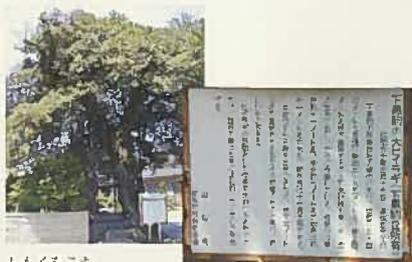
歴史と文化遺産



うばづか
姥塚古墳

南照院の境内にあり、西方には国衙の条里跡が続いている。現状はすでに発掘され、外観と石室を残すのみとなっている。

構造形式は、円墳横穴式石室を有し、円塚の高さ約10m、直径約40mである。石室の石材は自然石を用いており、東日本随一といわれている。



しもくろこま
下黒駒の大ヒイラギ

ほかの同種のものとは異なり、地上4mまで直幹。その上で太い枝を東、北、西の3方に出し、さらに分枝。根回り3.4m、目通り幹囲2.85m。雄株の巨樹。幹は左巻きによじれている。県天然記念物。



かいこくぶんじ こくぶんじ
甲斐国分寺跡・国分尼寺跡

国分寺は奈良時代に各国に置かれた官寺で天平13年(741)に聖武天皇の発願により建立され、その礎石が、臨濟宗国分寺境内に残る。礎石から金堂、講堂、中門、南大門などの存在が推測できる。遺構中最も良く残っている塔跡は14個の礎石が現存しており、3個は失われている。諸勅によると七重の塔だが、五重の塔だと見られている。また、国分寺跡から北へ500mの場所に国分尼寺跡(正式名称は法華滅罪之寺。)の礎石29個が残っている。北は講堂跡、南は金堂跡で、南北約63m、東西約36mの区画が国史跡に指定されている。



きたぐちほんくう ふじせんげん
北口本宮富士浅間神社

富士信仰の中心地。高さ18mの大鳥居は富士山の鳥居で、「三国第一山」の額を掲げている。三国は日本、インド、中国のこと。本殿は元和元年(1615)に郡内領主鳥居成次が建立。木花咲耶姫命(このはなさくやひめのみこと)が祀られている。



しょうがん
称願寺

正応5年(1292)に開かれた時宗の寺。一遍智真を開祖とする時宗は、遊行(ゆぎょう)宗ともいわれる。特筆すべきは重要文化財にも指定されている木造の他阿真教上人座像。座高81cm、薄いねずみ色に彩色されている。



みわ
美和神社

光孝天皇の時(9世紀)に甲斐国第2宮と定められ、戦国の世では歴代の武田の総領が武運長久、子孫繁栄を祈願して尊崇した。甲斐の国の代表的な古社として代々国守から尊崇を受けていたため、多数の遺宝が残っている。



駿州往還



駿州往還は甲府から昭和町・玉穂町・田富町・三珠町・市川大門町とほぼ現在の県道市川大門下部身延線に沿って割石峠を越えて六郷に入り、六郷町で富士川を渡って右岸へ到ったが、富士川舟運が開始されると鯉沢を経由するようになった。

経路は田富町布施で古道と分かれ旧若草町、旧甲西町(南アルプス市)を経て、増穂町青柳で現在の国道52号に合流し鯉沢町へ入りそのまま南下しほぼ現在の国道52号沿いを進み駿河国へ向かう道筋となっている。

日蓮宗総本山である身延山久遠寺への参詣路として栄え「身延路」とも呼ばれている。また、駿河の海産物を運ぶ道として大いに栄え文化財等も数多くある。

■駿州往還の起点を探して

…相生1丁目の道標(甲府市)

現在の国道52号、旧甲州街道の甲府市相生1丁目3番1号の角に『西しんしゅうみち、南みのぶみち』の石碑がある。これは新しいものであるが、第二次世界大戦以前にこの場所にあった道標を復元したものである。



この道標で甲州街道と分かれて駿州往還は始まり、現在の飯豊橋よりやや下流の渡し場『西条の渡し』を渡り南進することとなる。



■駿州往還の面影を探して…鯉沢宿

約7百年前に日蓮上人が開いた身延山へも舟運が便利で、鯉沢は宿場町としても栄えた。

明治期には生活物資の出入りはもとより、船を利用しての身延参詣の泊り客でたいへん賑わった。

繁栄を極めた富士川舟運であったが、明治44年の中央本線の開通により物資の輸送が鉄道へと移り、3百年の歴史を閉じることになる。



■門前町の賑わいは今も「身延山詣」

甲斐百八霊場のひとつ、身延山久遠寺は日蓮宗の総本山として、今も参詣の人が絶えない賑わいがあり、門までの道沿いには土産物屋や旅館、名物の湯葉の店が並ぶ。長い正面の階段は287段、360年ほど前に佐渡の信者が先祖の菩提を弔うために発願、数代にわたって完成させたものといわれる。左手には男坂、右手には女坂があるので、健脚ならずとも緑深い山へ入る道はある。

ロープウェイで奥の院まで足を伸ばすと、日蓮上人お手植えの杉を仰ぎ見ることができる。見晴台から望む七面山には守護神が祀られている。身延山とこの山を結ぶ参道の途中には赤沢宿があり、中世集落の面影ある民家が重要伝統的建造物保存地区として残されている。



コラム

みのぶさん

歴史と文化遺産

こちようぜん
古長禪寺

三門までの1kmほどの道筋はかつての門前町で、土産物屋、旅館など今もにぎわいを見せている。古長禪寺は深向院から国道52号をさらに北に1.5kmほど進み、少し東に入った閑静な場所にある。

旧客殿の四隅に植えられたという樹齢600年と推定される大ビャクシンがある。これは夢窓国師手植えの四つの白壇と呼ばれて国の天然記念物となっている。武田信玄は幼い頃、母の大井夫人に伴われて時の住持岐秀について参禅した。大井夫人が亡くなったあと、信玄は躑躅ヶ崎館近くに新たな長禪寺を建立して母の菩提寺としたので、ここは古長禪寺と呼ばれるようになっていく。



ほうぜん
法善寺

南アルプス市加賀美にある古刹。ここは中世、甲斐源氏の一族である加賀美氏が興った地であり、その祖・加賀美遠光の館跡に建つ法善寺は甲斐の真言寺院を代表するものの一つとされている。今から1200年前の大同元年(806)に大坊(現北杜市)に開創したのが始まりとされる。



なんぶ し
南部氏館跡

南部氏は甲斐源氏の一族である加賀美遠光の子光行がこの地の所領を得て南部を名乗ったことに始まる。文治5年(1189)光行父子は源頼朝に従い奥州藤原氏征伐に参加、戦功を立て奥州に所領を与えられたが、これを機に光行は奥州に下向、甲斐南部氏は子実長が継ぐことになる。



かしかざわ か し
鯉沢河岸

今から4百年前、徳川家康の命を受けた京都の角倉了以によって富士川が開削され、鯉沢から駿河の岩淵(静岡県富士川町)まで開通した。西郡路と駿州往還の交わる地点に位置していた鯉沢は、この開削により富士川舟運の要衝地、鯉沢河岸として流通の拠点として大きく発展することになる。

青梅街道



■青梅街道の起点を探して

やまざきさんさろ まりしてん
…山崎三差路摩利支天(甲府市)

甲州街道を甲府市酒折2丁目の山崎三差路で左に分岐し、東へ向かって進むこの場所が青梅街道の起点とされている。JR中央線の踏切を越してすぐ左側にある摩利支天神の北で、甲府北バイパスと合流している。現在も幅4.5mの地割りらしいものがのっっている。摩利支天はインドの神で、梵語の「マリーチ」からきている。日本では武士の守り本尊とされ一方では「旅の守護神」とされた。青梅街道と甲州街道の分岐点であるため「旅の安全」を祈るために祀られたとされる。



■青梅街道の面影を探して…萩原口留番所跡(塩山市)

江戸時代に甲州には24カ所の口留番所が置かれたがそのひとつである。青梅街道の大菩薩峠の麓、甲府から6里の地点にある。成立年代は明らかではないが上小田原にあり、番屋坂の地名も残り、塩山市の史跡となっている。



青梅街道は酒折村山崎(甲府市山崎)を起点として、横根、桜井(甲府市)、松本、鎮目、別田(笛吹市)、正徳寺(山梨市)から、笛吹川の地蔵渡しを経て上神内川、小原(こごで)秩父街道と分岐、下井尻から下塩後、上於曽、千野、下粟生野、中萩原、上小田原、上萩原(塩山市)から大菩薩峠を越え、上の峠は丹波山(向かい)、下の峠は小菅へと向かい、やがて内藤新宿で甲州街道と合流する。現在の柳沢峠越えのルートは明治11年からである。なお、塩山市千野の獅子之前遺跡で往時の道跡が発掘調査された。甲州裏街道とも言われ、上小田原には口留番所が置かれ、番屋坂の地名も残り、塩山市の史跡となっている。

■山梨の地名の由来、「山梨岡神社」に鳥居なし

県名ゆかりの神社として知られ、境内には郡石(こおりせき)と呼ばれる山梨郡と八代郡の境界を示す石がある。さて延喜式神名帳にもある神社だが鳥居がない。神社背後の御室山で、ある騒動があったことに由来する。山の中腹にある長谷寺と大善寺、この寺の僧侶間に争いごとが生じ、二寺ともに伽藍を消失する事件が起こった。その時、大善寺の僧が長谷寺に協力した山梨岡神社の鳥居を持ち帰り焼き払った。これが「鳥居焼き」の始まりといわれ、長谷寺の僧が大善寺から笈を持ち帰り、焼き払ったのが「笈形焼き」の始まりになった、というのだ。山中で起きた事件のてんまつ、しかし現代ではそれらが行事として楽しまれている。

コラム



歴史と文化遺産



よこね さくらい
横根・桜井積石塚古墳群

甲府市横根町から笛吹市石和町大蔵経寺山にかけての南向き緩斜面に展開するもので、現在140基余りが確認されている。成因については朝鮮からの渡来人築造説と環境自生説とがある。



くらもとはいじ
寺本廃寺

寺本廃寺は、およそ130m四方の伽藍配置(法起寺式)をもつ本格的な寺院であり、回廊・金堂・講堂・塔などから構成されていた。この寺は山梨県最古の寺で国分寺跡と言われている。また現存する寺塔跡から三重の塔があったと考えられている。

平安時代初め、留学先の唐から帰った最澄は、すでに祀られていた日吉の神を守護神として比叡山に延暦寺を建立し、天台宗を開いた。そして最澄がかつて遊学した唐の天台山国清寺の地主神「山王彌真君」に因み、日吉の神を山王と称した。その後天台宗とともに山王信仰が全国に広まり、御分霊を祀る神社が全国に建てられた。このことから、寺本廃寺は天台宗の寺だったと考えられる。



まんりきばやし かんこうてい
万力林・雁行堤

武田信玄が、笛吹川の大洪水に備えるため、護岸工事を施工し、赤松等を植林した防水林。現在は公園となっている。

武田信玄が、父信虎に命じられ、兵法『雁行の陣立て』を基に築いたといわれる堤防。「雁行の陣立て」とは空飛ぶ雁の列のように斜かにする陣形。

洪水を敵軍にたどえ、堤防をはすかに並べて築くことにより、川の流れを弱め流れを変えるようにした。高さ5.5m、長さ33mで巨石を積み重ねて築かれているといわれているが、現在はほとんど砂に埋まっている。



こうかく
向嶽寺

抜隊禪師が永和4年(1378)、ここより北の竹森に草庵を結んだのに始まる。

寺域は木立におおわれた外門、築地塀を巡らせた中門、小さな橋を渡った向こうには仏殿、さらに塀の内側に方丈と書院などの建物が一直線上に並ぶ。国重要文化財の中門は四脚門・切妻造檜皮葺で室町時代中期のものである。



うんぼう
雲峰寺

雲峰寺の総門(黒門)は国道沿いに建てられているのでこれが目印になる。古びた190段もある石段の途中に仁王門があり、登り切った境内の正面に本堂、右に庫裏、本堂の裏手には書院がある。いずれも国の重要文化財。本堂は単層入母屋造で正面に唐破風向拝が付けられたもので、平成9年に檜皮葺きの屋根が修理されている。



かんそうやしき
甘草屋敷『高野家住宅』

江戸時代に薬用植物である甘草の栽培をして幕府に納めていた家で、古くから「甘草屋敷」と呼ばれてきた。

住宅は19世紀初頭の建築と考えられ、桁行十三間半(24.8m)、梁間六間(10.9m)あり、屋根は大棟を東西に通した切妻造、茅葺型銅板葺で、南面中央部に2段の突き上げ屋根を設けた大型民家である。屋根を支える柱は高く棟まで通る棟持柱で、これに梁を重ねて渡した間に見せ貫を通し漆喰塗とした妻壁の構造は、優れた美観を呈している。



佐久往還



■佐久往還の起点を探して… 葦崎追分 (葦崎市)

葦崎の本町通りは、上宿・中宿・下宿からなり、佐久往還の分岐点は上宿と中宿の境で、通称「葦崎追分」といわれた地点である。当時は九尺(3.4m)位の道であったというが、現在では12mに拡幅されている。この北隅に「右信州佐久の郡みち 左信州すわ上みち」と刻んだ道標があった。

葦崎宿から藤井平をいく佐久往還は小田川の桐の木橋までは平坦な道を進むこととなる。



佐久往還は甲州街道葦崎宿から分岐して、信州佐久の岩村田宿(長野県佐久市)に至る脇往還である。佐久甲州街道とも呼ばれた。葦崎、相袋、絵見堂、小田川(葦崎市)、大豆田、若神子、念場原(北杜市)を通じた。難所の弘法坂の手前の長沢には口留番所が置かれた。また、若神子から川俣、津金、海岸寺峠を越え、浅川、平沢に至るルートは佐久道とも呼ばれた。浅川には口留番所が置かれた。

■佐久往還の面影を探して… 葦崎宿 (葦崎市)

柳町宿から3里20町50間。問屋場は中宿にあり、次宿へそれぞれ継ぐとともに佐久往還の若神子宿、西郡路の荊沢宿への分岐点になっていた。また富士川舟運も鯉沢河岸から釜無川をとり葦崎宿に近い舟山河岸まで延長され、物資の集散地としてにぎわった。家の前に三角の空き地を置く、土蔵造りの町屋などが今も面影を残す。



■平安時代から「名馬の産地」だった甲斐の国

コラム

聖徳太子を乗せ富士山へと天を駆け抜けた馬は体が黒く、4本の足が白い烏駒という甲斐の馬だった。平安時代から甲斐の国は名馬の産地として知られ、朝廷に馬を献上する御牧に指定されていた。八ヶ岳と茅ヶ岳のすそ野の、柏前(北杜市高根町念場原周辺)、真衣野(北杜市武川町牧原周辺)そして穂坂(葦崎市穂坂周辺)には朝廷の牧場が設けられた多くの馬が飼育された。良い馬は約1年間調教され、毎年夏60頭位が朝廷へと納められていたという。これを駒牽(こまびき)といい、甲斐の草原を走る馬の姿があった。11世紀になり甲斐源氏が台頭してくると、戦のための馬が必要となり、軍馬の放牧地として様変わりしていく。



歴史と文化遺産



げんたがじょう
源太ヶ城跡

甲斐源氏の祖である新羅三郎義光の孫にあたる逸見冠者の黒源太清光が築城したと伝えられる中世の山城で、遺構が良好に残っている。双峰の山を利用した郭配置は珍しく、頂上にはそれぞれ平坦で広い郭を持ち、斜面に帯郭を巧みに配置した構造をしている。



しんぶ
新府城跡

天正3年(1575)5月、三河長篠において武田勝頼率いる武田軍は織田・徳川連合軍に大敗を喫し、以降、武田家の凋落が始まる。甲斐における備えとして築かれたのがこの新府城である。

天正9年(1581)2月、真田安房守昌幸を普請奉行に昼夜兼行で行われた新城建設は、その年の暮れに一応の完成をみることとなり、12月25日、勝頼はそれまでの躰躰ヶ崎館を捨て、新府城へ本拠を移すこととなった。



しょうふく
昌福寺

曹洞宗。十一面観音、梵天立像、馬頭観音(いずれも県重要文化財)の木造仏3体が観音堂にある。寺記によると、3体とも天平8年(736)の行基の作で、藤原期の一木造りの特徴を持っている。



わかみこ
若神子城跡



甲斐源氏の祖・新羅三郎義光、源義清の城だったともいわれるが、別説もある。北城、古城、南城で構成。武田信玄の時代は、信州攻略の重要な中継拠点とされた。武田氏滅亡後も、甲州の領有をめぐる徳川家康、北条氏直が争い、陣を置いたという。現在、ふるさと公園として整備され、のろし台が復元されている



ながさわ
長沢宿問屋

土蔵の妻に「問屋」の屋号が刻んである。大きな母屋の前に門と塀を配し、地元では「お問屋さん」と呼ばれている。



ながさわ
長沢口留番所の門

現在の番所の門は移築され残存する。門の西側には道祖神があり、長沢口留番所唯一の遺構である。番所は桁行4間、梁間2間の規模で高さ1丈2尺。



かいがんじ
海岸寺

本堂は慶長8年(1603)建立され、寛文11年(1671)に再建され福聚殿(ふくじゅでん)とよばれる。本尊の釈迦牟尼如来が安置されている。本堂左手の石段上にある観音堂は大悲閣と呼ばれ、本堂と同じ慶長8年の建立、現在の建物は文化7年(1810)徳川末期の名工立川和四郎富昌が再建築したもので、正面のアワとウズラの彫刻は日本の木彫史を飾る貴重で、名高いものである。



穂坂路



穂坂路は別の呼び方で川上口ともいう。茅ヶ岳山麓を横断し、甲府と信州佐久の川上とを最短距離で結ぶ古道。塩部、千塚(甲府市)、島上条、滝坂、龍地、堅町、つくし野、志田(甲斐市)、上ノ山、日之城、原、一本松(韮崎市)谷井、富士見ヶ丘、浅尾新田、浅尾(北杜市)のルートと堅町で分かれて茅ヶ岳寄りの団子、笠石、原(甲斐市)、三ツ沢、宮久保、三之蔵(韮崎市)、正楽寺のルートがある。

浅尾から須玉町(北杜市)を通り信州峠を上がり川上に至る。江草には根古屋の口留番所、八巻には馬場の口留番所、黒森口留番所、小尾の口留番所、五軒番所跡の地名も残る。いずれも他地域へ抜ける交通の要衝である。

穂坂路の起点を探して…塩部関屋地蔵尊前(甲府市)

塩部の交番裏にあるお堂に安置された石像。
台座には天明6年(1786)9月11日門陵山法印思敬が記した長文の銘がある。甲府の元通という人物が伊勢国関の地藏菩薩に帰依し、それを模して造立したという。
厄除・安産・交通安全の靈験があり今も信仰されている。かつては塩部の道沿いに南面しており、穂坂路の起点とされている。



穂坂路の面影のあるところを探して…龍地宿と武田不動尊像(甲斐市)

寄せ木造り。高さ33cm、台座を含めた総高は61cm。室町時代末期—江戸時代初期と鎌倉時代の作という2説がある。かつて龍地村は地藏ヶ原という台地上に集落が散在していたが、武田信玄によって屋敷割が定められ龍地宿を形成いまま宿場の面影を残す。



コラム

「煙が合図」情報伝達は早いもの勝ち

「のろし」は烽火とか狼煙とか書き、烽はのろし台と煙や火を、烽火はのろしそのものを意味していた。また狼煙は、オオカミの糞を火種にしたことから由来した文字。しかし日本では藁や杉の葉、火薬が焚かれその役割を果たしていた。

武田信玄が築いたのろし台の伝達網は躰躰ヶ崎館を中心に長野県・埼玉県・静岡県・神奈川県にまで張り巡らされていたと考えられている。そののろし台が北杜市須玉町内には12か所あったことが判明、獅子吼城跡に復元されている。そのしくみは、跳ね釣瓶の先端に火種を入れ、空中に上げるといったもの。最近の実験結果では何と新幹線での伝達速度とさほど変わらない早さだといわれている。



歴史と文化遺産



ほうせん
法泉寺

鎌倉末期の元徳(北朝暦)・元弘(南朝暦)年間(1329~34)に、甲斐守護武田信武が開基となり、夢窓国師を開山に創建された。天正10年(1582)勝頼が天目山下田野で自刃した。この時、妙心寺住持の南化和尚がその首をもらい受けて、妙心寺の開山堂のかたわらに手厚く葬った。この時、法泉寺の住持・快岳和尚もそこに居合わせ、勝頼父子の歯髪を持ち帰って同寺に葬った。武田氏の滅亡により菩提寺を持たなかった勝頼の菩提寺となる。



えんたく
塩沢寺

天曆9年(955)に空也上人が開基となって創立、のちに蘭溪道隆が再興したと伝えられる。山を背にした寺らしく境内へは石段を登る。山門を潜ってさらに登る。登り切ったところが地藏堂。桁行4間、梁間3間、屋根は一重寄棟造り。簡素ではあるが外部軒廻り内柱上の斗きょうや木鼻の絵様の彫刻、内部の虹梁など室町末期の特徴を残しており、国の重要文化財である。



こうしょう
光照寺薬師堂

甲斐国主武田信虎によって永正7年(1510)団子新居村(旧登美村の一部)から岩森村坊沢に移転、宿坊を数多く備えた寺院として隆盛していたといわれる。天正10年(1582)の織田軍の攻撃にも難をのがれて残ったのが現存する薬師堂で、国の重要文化財に指定された貴重な建造物。

薬師堂は方3間宝形造り、屋根は栓皮茸形銅版葺、紅梁のまゆ(弓形の線り形)、そで切りの形態、板葺股の軽妙な山線など細部に優れた技法が見られ、室町時代後期の特色を今日に伝えている。



ばんば
馬場口留番所

北柱市須玉町には馬場のほか根古屋、岩下、小尾口留番所に置かれていて、明治初年に番所制度が廃止されるまで村役のもとで管理されていた。建物が残っているものとしては県下で唯一もので貴重である。また、番所の門は北柱市明野町勝永寺の山門として移築されている。



かみな
加牟那塚

金塚、釜塚ともいわれる。県重要文化財。高さ7m、直径40mで東日本最大規模。石室は横穴式で、人が歩ける高さと広さを備える。ふた石は7枚の巨石を用い奥壁は巨大な一枚石。出土遺品は不明、円筒はにわ、形象はにわの破片が見つかっている。



ねごや
根古屋神社

獅子吼城の守護神として祀られたという。境内には田木(北側)、畑木(南側)と呼ばれるケヤキの巨樹がある。芽吹きの遅速によってその年の田畑の豊凶を占うのでこの名が付いた。国指定の天然記念物である。



逸見路



逸見路は別名諏訪口とも言う。甲州街道開設以前は諏訪方面に至る重要な交通路であり、しばしば軍用道路として利用された。穂坂路の上ノ山から分岐したという説もあるが『甲斐国志』では一つの道をもつて逸見路とは呼んでいない。一般に言われているものは貢川橋(甲斐市)を起点とし、堅町、団子(甲斐市)、絵見堂、駒井、中条、次第窪(韮崎市)、富岡、日野、花水、台ヶ原(北杜市)という道筋となる。江戸時代に甲州街道が整備されると釜無川の氾濫の際、迂回路として韮崎から青坂を上り新府城付近を抜け、重久(韮崎市)、富岡、渋沢、小淵沢に至る原道と呼ばれる道が逸見路と一部重なる。

逸見路の起点を探して …貢川橋(甲斐市)

逸見路の起点については地誌と現地との間に相違がある。『甲斐国志』では、穂坂路からの分岐点を日野城としている。これに対して史的な証拠はないが「逸見路」「逸見道」と称する道は旧竜王町と旧敷島町の境界にある貢川橋付近を起点とされていたといわれている。



逸見路の面影を探して…小田川(韮崎市)

韮崎市絵見堂から小田川までは佐久往還と重なる。小田川交差点を通り、柳原神社を過ぎ佐久往還は直進して若神子に至るが、逸見路はここより分岐する。また、棒道もこの小田川付近を起点としている。現在の国道とほぼ重なる場所となっており、古道の面影を残す景観がある。



コラム

富士見三景「花水坂」

大昔から富士山の美しさに人々は心ひかれ、癒されてきた。富士見の地名があちこちにあるように、富士を見る名所も随所にある。そこで、富士見三景と言われるのが花水坂、御坂峠そして西行峠。いずれも富士を見た人の感嘆の一声が聞こえてくるような場所である。さて、花水坂はどこ、となると何故か二か所ある。北杜市白州町と北杜市長坂町、いずれにも記念碑が大正時代に建てられている。いずれも富士山景勝の地。川面に映す花々の美しさ、眺望すればそこに富士が…。先人たちが誇りとした日本一の山への想いがある。富士見三景は逸見路の花水坂、河内路の西行峠(旧富沢町)、そして鎌倉街道の御坂峠で、眺めの良さが今に語り継がれている。



花水坂(北杜市白州町)

歴史と文化遺産



やなぎはら
柳原神社

創建は不詳だが、文化年間の塩川の氾濫で社殿を流失し、古社地から今の地に遷座したと伝える。はじめ神明宮と称したが、藤井堰の堰口に祀られていた水神を相殿に配祀、さらに金比羅大神を併せて祀ったので、柳原三社とした。



けんぼう
見法寺

日蓮宗。文永11年(1275)日蓮が説教をした霊地に、身延四世日善が興国2年(1341)に創建したのが始まりという。二度の火災の後現在の本堂が再建された。境内には集落内から移された「日蓮大菩薩御旧跡」の碑があり、その台座が道標となっているが旧位置については不明とされている。



だいどう
大堂の観音堂

400年ほど前、絶壁の中腹の洞窟内に観音像が祀られ、靈験あらたかであったが横山太郎という武士が江戸の浅草寺へ移したと伝えられている。現在は「大堂」と呼ばれ、堂が建てられている。堂の裏には、10基の馬頭観音が安置されている。



花水坂(北杜市白州町)

『富士見三景の一 花水坂』花水坂は、釜無、尾白、大深沢の3川台流の地で川を挟んで山桜の大樹数10株の花が咲き乱れ、水に映す花かげの美しさは富士岳の眺望絶景の名所富士見三景即ち花水坂・御坂峠・万沢の西行坂と、その地名は高く賞賛された。



花水坂の碑(北杜市長坂町)

大正15年(1927)建立で、「富士見三景之一 花水坂の碑」とある。この付近にはマツやサクラの古木もあり、東屋も造られている。園地風に整備されている。



花水坂(北杜市長坂町)

古くは、若神子から波沢・台ヶ原へ抜ける道で天正午の年3月2日信長が新府に攻め入るのに台ヶ原を経てこの道を抜けたといわれている。また、天文年間にも諏訪小笠原の徒が甲州に入攻した際、武田軍が同じく花水坂で敵を迎え討ったといわれている。



花水橋
(北杜市白州町)



花水橋
(北杜市長坂町)

棒道



武田信玄が北信濃攻略のために造った軍用道路で、八ヶ岳の麓を直線に近い最短距離で切り開いているところからこう名付けられた。棒道は大泉町大芦(北杜市)から長坂町小荒間(北杜市)、小淵沢を経て、八ヶ岳西麓を信州柏原(長野県茅野市)に至り、さらに大門峠を越える。「甲斐国志」によると上・中・下の棒道三筋説が記されているが確証はない。さらに「上の棒道」は、実際は近世になって諏訪藩が棒道の一部を利用して造った交易道であり、「中の棒道」も「下の棒道」も、それ以前から存在するとみならず説もあるという。

大芦から小荒間を過ぎたあたり、道に沿って一町ごとに石仏が並んでいる。これは幕末期に旅人の道しるべとして、旅の安全を祈って祀られた西国・坂東三十三観音を模したものと伝えられる。

棒道の起点を探して…

わかみこ 小なかわ
若神子(北杜市須玉町)、小田川(韮崎市)

『甲斐国志』、『叢記』両書によると、棒道には上中下と三筋の道があったことが書かれている。起点については、「穴山」と「若神子」があがっている。その中で「逸見路の旧穴山村」から分岐しているとされるがその地が不明な点が多いため、佐久往還の小田川分岐点を一つの起点と考えられている。また、若神子についても同様に佐久往還との分岐を起点と考えられている。



棒道の面影を探して…渋沢宿(北杜市長坂町)

近世の渋沢宿は道の西側にあり、東側は塚川村原組であり、通常は両宿と呼んでいる。かつては、旅宿や茶屋で馬繋ぎ場があり賑わったものだという。長坂駅開設以前の日野春駅への交通、さらには韮崎への運輸などで栄えた。道沿いには県指定天然記念物のヒイラギモクセイがある。また、上宿には薬王山妙林寺があり、薬師如来像が安置されている。



信玄の軍用道路は最短距離の「棒道」

コラム

武田信玄が諏訪へ、さらに信州へと攻め入る時に拓いた道が棒道と呼ばれるほぼ直線に近い3本の軍用道路。現在も残る八ヶ岳南麓、小淵沢周辺の「上の棒道」には小荒間番所があり、農民が交代で敵から集落を守るための見張りをしていただと伝えられている。

この棒道にはワラビが自生し不思議なことに、この棒道のワラビはアクがない、と伝えられている。ここにも信玄にまつわる伝説がひとつ残っている。戦国時代、貴重な食料だったのであろうワラビ、戦のさなかアクをとる調理は手間仕事。信玄がワラビをひとにらみ…、するとにらまれたワラビは怖くてアクのないワラビになったという説話がある。



歴史と文化遺産



へみ
逸見神社

建御名方命を祭神とし、例祭は5月9日に行われている。創立年代は不詳であるが、古くは谷戸城の南側にあったと、江戸時代に書かれた「甲斐国志」に記されている。逸見清光はじめ逸見氏代々が崇敬した神社である。



さんぶいちゆうすい
三分一湧水

日本名水百選の一つ。武田信玄の時代から下流農村の農業用水として使われていた。今でも一日8500tの水が流れ、下流3域の水田に利用されている。ますの中にある石が三方に水を分ける工法が見どころ。周りの林と水の流れが心地よい。



こあらま
小荒間古戦場跡

このあたりの地名を「小荒間」というのは「小さな開墾地」という意味だといわれている。天文9年(1540)2月18日、信濃の国より総勢3500余りの兵が小荒間に押し寄せてきた。武田信玄は即時出陣。小荒間古戦場跡は信玄が旗本を率いて夜合戦し、勝利を得た場所だと伝えられている。史実は明らかではないが、信玄が本陣を敷いた「中屋敷」をはじめ、御座石、遠見石、刀架石、馬跡石、鞍掛石など、合戦ゆかりの遺跡も残されている。



やとじょう
谷戸城跡

甲斐源氏・新羅三郎義光の孫である黒源太清光の居城とされる。標高850mの山頂の三角形の郭を中心に東西約500m、南北約300m広がる。周囲は、春に桜が咲き誇る名所として親しまれている。



かんねん
観音堂

曹洞宗の西方寺があった所で、この寺は廃寺になったが方三間の観音堂が残る。多くの観音像を残している。弘法大師像・千手観音・如意輪観音・馬頭観音・十一面観音・聖観音など。



おおい がもり
大井ヶ森番所跡

大井ヶ森(標高約880m)は武田時代、諏訪へ行くときの大切な通過場所であった。「(天文11年(1542)、大井ヶ森御陣所を信玄が通った。)」という記録がある。

江戸時代になると、同所に大井ヶ森口留番所が置かれた。警備には大井ヶ森村と白井沢村・大八田村の農民があたり、江戸末期まで関所としての役目を果たしていた。現在、番所で使用した井戸が残っている。



きんせい
金生遺跡

金生遺跡は、縄文時代後～晩期(今から約3,500～2,500年前)の集落の跡である。人々が住む住居のとなり、当時の墓や配石置構(祈りを捧げる場所)が多くの石を使って作られている。この遺跡からは、煮炊きの時に使う土器と一緒に、祈りを捧げる時に使う土偶や土版、石棒や石剣等が出土しているほか、祈りを捧げるときに身を飾ったであろうヒスイのペンダントや土で作った耳飾り等が多量に出土している。





国土交通省

国土交通省 関東地方整備局 甲府河川国道事務所

甲府市緑が丘1丁目10-1

TEL:055-252-5491 FAX:055-251-1171

<http://www.ktr.mlit.go.jp/koufu/>

この冊子は、国土交通省関東地方整備局 甲府河川国道事務所のご協力により、学校法人山梨学院が増刷いたしました。